

10

ニホンミツバチを利用した草原維持と再生促進活動

- 実施主体 瀬の本の松並木を守る会
- 実施場所 阿蘇小国郷内 瀬の本地区牧野内中心
(各草地・牧野・自然林等)
- 実施期間 平成31年4月1日～令和2年3月31日



<背景・ねらい>

牧野組合で牧草生産などに原野を採草利用しながら野焼きも毎年行い、草原保全に努めている。しかし牧野構成員の減少により草地と林地の境界が荒廃してきている。そのため荒廃地に自然および人口の花木（その地域に昔からある在来植物）を育て草原維持を行う。

維持管理した原野周辺にミツバチの巣箱を設置し人と生物の共生を理念に活動する。ミツバチは蜜の生産にとどまらず、農産物・果樹の訪花・受粉の役割など、自然環境の循環においても大きな役割を担っている。

白川原野の松並木周辺、矢ヶ部原野付近の田畑などで実施しており、今後、阿蘇郡市全体に活動を広げたい。

■実施概要

- ①人と生物の共生を理念として、草地と林地の境界や周辺の田畑などの荒廃地に、在来植物を育て草原維持を行う。
 - ・草地と林地の緩衝帯を、地域に昔からある花木（トチノキ・カシノキ・ヤマザクラ・ヤマモモなど）とし、草地を管理しやすくする。
 - ・休耕田の田畑に、ニホンミツバチが集まりやすい小さな花を付ける植物（菜の花・レンゲなど）を植える。
- ②草原で野焼きや採草をすることで草花が咲き、そこに集まるニホンミツバチ用の巣箱を設置し、蜜の採取及び観光客への販売を行う。また活動を通じて、野焼きや採草、ミツバチの利用が自然環境の循環としてつながっていることを普及啓発する。

■実施体制

- ・実施運営：瀬の本杉並木を守る会会員（現在8名）、有限会社八菜家（販売）



■成果

- ①休耕田の活用や杉・檜ではない地域の在来植物を用いることが、里山づくりの再考にもつながる。
- ②蜂蜜を100個程度販売し、売上の1%を草原再生募金に寄付（ロゴマーク協賛商品）



■実施者の感想

- ・水害や土砂くずれの影響で、巣箱を設置できる場所や販売できる蜜の採取量は限定的であった。
- ・黒川温泉周辺でも取り組む予定だったが、現在の新型コロナウイルスの影響で観光客が遠のいていることが大きな課題となっている。
- ・今後も活動を継続するとともに、呼びかけや普及啓発を行い、実施者（会員）や賛同者（ファンクラブ会員）を増やしていきたい。